



TITLE:

中國古代の商と賈：その意味と思想史的背景

AUTHOR(S):

山田, 勝芳

CITATION:

山田, 勝芳. 中國古代の商と賈：その意味と思想史的背景. 東洋史研究
1988, 47(1): 1-29

ISSUE DATE:

1988-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154233>

RIGHT:

東洋史研究

第四十七卷 第一號 昭和六十三年六月發行

中國古代の商と賈

——その意味と思想史的背景——

山 田 勝 芳

序 問題の所在

- 一 諸書籍における商と賈
 - 二 『史記』『漢書』『後漢書』の商と賈
 - 三 法制上の用語
 - 四 算緡令の商と賈人
 - 五 『白虎通』商賈篇と鄭玄註の意味
- 餘論 中世における商と賈

序 問題の所在

1

中國において商人・商業を表わす商字と賈字は、通説的に商Ⅱ行商、賈Ⅱ坐賈と理解され、とりわけ古代では班固撰『白虎通』卷六商賈篇、鄭玄『周禮』註等でそれが明言されており、動かないものと考えられてきた。例えば加藤繁氏は

『史記』平準書の譯註で、元狩四年（前一一九）の算緡令の條に「賈は坐商なり。店舗を開きて營業するものなり。商は賈と相對すれば行商の意味と爲る。」としており、これが定説化してきた。

しかしながら『史記』『漢書』『後漢書』及び漢以前の諸書籍を通覽した時、商Ⅱ行商、賈Ⅱ坐賈というような明確な相違、あるいは使い分けがなされているとは言い難いことは明瞭な事實である。この點、つとに宮崎市定氏は河東解池の鹽と商業・商人の關係を論じた研究において、『白虎通』の説について「商字が行販を意味するは無難として、賈字は實際の用例に就いて見るに、必ずしも坐販を意味して居らぬようであり、これは商が特に行商を意味する所から、強いて賈字をこれと相對させて坐賈としたもので、「例の漢儒一流の常套手段であらう」とした。『白虎通』商賈篇の文は次の如くである。

商賈とは何の謂ぞや？商の言たるや商なり。その遠近を商^{はか}り、その有亡^{うむ}を度り、四方の物を通ず。故にこれを商と謂うなり。賈の言たるや固なり。その有用の物を固めて、以て民の來たるを待ち、以てその利を求める者なり。行くを商と曰い、止まるを賈^とと曰う。易に曰く『先王以て至日に關を閉じ、商旅行かず、后^{きみ}は方を省みず。』論語に曰く『之を沽らんかな。我れは價^{（賈）}を待つ者なり。』と。卽しかくの如くんば、尙書に『肇めて車牛を牽き、遠く賈に服し、用て（その父母を孝養す）。』と曰うは何ぞや？遠行を言うこと知る可きなり。又その父母を歛しむと言わば、留^{（留）}りて之を供養せんと欲するなり。

商賈とは何かという問いに對し、行を商、止を賈とする説明をし、それを權威づけるために『易』復卦象傳と『論語』子罕篇の文とを舉例した。ところが質問者は同じく經書たる『尙書』酒誥篇では賈は明らかに行商を意味しているではないかと質した。それに對しては、その下文に「父母を孝養す」とあり、あくまでも留^{（留）}っていると考えられるからやはり坐賈である、と強辯している。この議論の展開だけを見ても、後漢章帝建初四年（後七九）の白虎觀論議の時點でさえも、決して商Ⅱ行、賈Ⅱ止という區別、とりわけ賈Ⅱ止が定着していなかったことを知りうる。それではなぜ白虎觀論議で商と賈

の意味が問題とされたのか？なぜ一應商Ⅱ行、買Ⅱ止という結論をみたのか？そしてそれが以後どのような影響を与えたのか？と問う必要が生ずるのである。

あるいはまた商と買に明確な使い分けがなされていない以上、實態に即して場合場合で考えねばならないとする立場も出てこよう。もとより商人の存在形態や商業形態は多様であり、商人・商業の分析に實態を踏まえるべきことは當然であるが、この方法では無原則の場合當りの解釋となる恐れがある。従つて意味を明確に區別できないにしても、漢代以前の各書籍等においては商・買字はどのような使われ方をし、そこにどのような傾向を見ることができかねるかを具體的に検討しなければならぬ。この商と買の傾向性、あるいは特徴的用例を押えることが、算緡令中の商と買人のようなキータムを解釋する上で決定的な意味をもつてくるのである。

即ち私は本稿において、一つは秦漢時代の商人・商業の實態、及び商人・商業と國家との關わりの解明という商業史上・財政史上、更には身分制史上の課題解決のために、もう一つは『白虎通』をめぐる問題に端的に現われてくるのであるが思想史上の課題解決のためにも、この商と買というタムそのものを問題にしたいと考えるのである。

一 諸書籍における商と買

右の課題を解決するための出發點とすべき研究が二つある。一つは先の宮崎市定氏の研究であるが、もう一つは小島祐馬氏の研究である。⁽⁵⁾小島氏は商(殷)民が周によつて分割され、各國において商業交易に従つたから、「その行商人をば最初その國籍によつて商人の名をもつて呼んでいたものが、ついに商人といへば行商人を意味することとなり、さらにそれが轉じて行商と坐買とを問はずべて交換の媒介をするものと呼ぶ名稱となつたものではあるまいか。」とした。

一方宮崎氏は、買がカとコの二音をもち、且つカ音の方が古いということを出發點として次のように述べる。解池の鹽が鹽と呼ばれ、その賣買、更には一般商品や商業行爲も鹽と名附けられ、やがて沽・居の文字も代用された。商業・貨幣

經濟の發展、商人の擡頭は、この鹽から商業・商人を意味する貝偏の貼乃至直字を生じさせ、字形が相類することから賈と混同され、遂に賈のみが使用されるようになり、賈は二音二義を有するようになったのである。『白虎通』の引く『尚書』の文は「大カラヴァンを聯想せしむる」し、『論語』は商賈の意味であるなら行商であるし、『史記』卷八五、呂不韋列傳で「大賈人」とされる呂不韋も行商である。また同卷一二九貨殖列傳には「賈貸行賈、郡國に徧し」とあり、賈は坐賈に限定し難い。

この示唆する所の多い兩氏の研究を基礎として、先秦から漢代に至る、三史を除く諸書籍の商字と賈字の用例を追ってみたい。もとより漢以前の各書籍は、その全書の成立年代、あるいは各篇、更には各記事の成立年代や、それが指し示す時代などに多くの問題があり、慎重に扱わねばならない。従つてこの點を十分考慮に容れながら、同時に一冊のまとまつた書物として全體としてどのような傾向があるかを見る必要がある。(6)

まず『左氏傳』。昭公一六年（前五二六）の條で鄭の商人について賈人と商人とを互用していることの指摘は既に(7)あるが、それに加えていくつかの傾向を指摘することができる。(一)賈買行爲については、「害を賈^かうなり」（桓公一〇年・前七〇二）、「既に賈を成す」（昭公一六年）、「馬を賈う」（昭公二九年・前五一三）などのように賈を用いるが、商を使う例はない。(二)身分制的には、「庶人工商」（桓公二年・前七一〇）、「士……庶人工商阜隸牧圉」（襄公一四年・前五五九）、「庶人工商」（哀公二年・前四九三）のように、前後を通じて商を使うことが多いが、昭公二六年（前五二六）の「工賈は變らず」のように士農工と並べて商人一般を論ずる時に賈が使われた例もある。(三)「鄭商人」（傳公三年・前六二七）と「鄭賈人」（成公四年・前五八七）とあるように、昭公一六年の例同様、同じ鄭の商人を指す場合でも賈人を使うものもある。(四)右の襄公一四年の所には、それに續けて「商旅は市に于いてし」とあり、商人一般を指して身分制的に用いられた商旅という言葉が見られ、しかもそれは市での交易を行うものとされておき、一方昭公一三年（前五二九）には「市賈の如し」という市中の商人について賈を使う例もある。(五)概して商人を表わす賈は宣公以降に多く、その最初の例が同一二年（前五九七）のものであ

る。これは晉の士會の言中に楚の民について「商農工賈」とあるもので、商と賈とが異なるものであるかのような例なのである。これに晉・杜預は註をつけていないが、唐・孔穎達疏では『國語』の四民を引きつつ、士は從軍しているから除かれ、また行商と坐賈は異なるから商と賈を分けて四民としたのであると言う。しかし孔疏は四という數字にこだわり過ぎており、右の如き『左氏傳』全體を通してみた商と賈の使用状況からしてもこの解釋には従い難い。むしろ商民の系譜の商と、鹽の賣賈に起因する賈とがほぼ同じ意味に使われながらも、その來源が異なる所から、感覺的に差あるものとされてきたことによつてこのような發言がなされたと考えるべきであらう。これはいわば歴史的解釋である。鋭い思想的對立の場にこの一文が置かれた時、それが果す役割は自ずから別である。この點は後述する。

次に『國語』。『國語』は戰國時代に春秋各國の年代記を材料として、平・均・和の政治思想で一貫させて成立したものである。⁽⁸⁾商・賈の例はあまり多くはないが、その少ない例の中では商の方が多く、賈は『左氏傳』と同様、春秋後期の記事に見られる。⁽⁹⁾比較的古い狀況を反映した記事とみられる齊語の四民（士農工商）を始めとして、身分制制には商が用いられている。晉語四の文公元年（前六三三）のこととされる「工商は官に食む」という記事は、工商が官府に隸屬していた古い狀況を窺わせる。また晉語八の平公末（二六年・前五三三死）の記事に「富商」という言葉が見られる。⁽¹⁰⁾越語上では商人一般を指して賈人が使われ、時間的價格差による利益獲得を行う前近代の商業の本質を述べた一文が興味深い。

『墨子』では、貴義篇の「今、士の身を用うること、商人の一布を用いることの愼に若かざるなり。」⁽¹¹⁾商人の四方に之くや、市賈信徒（信徒）すれば、關梁の難、盜賊の危有りと雖も、必ず之を爲す。」に典型的なように、商人のみが用いられており、賈は價の意味でのみ使われている。なお比較的早い成立とされる尙賢上篇に「農と工肆に在る人」とある「肆に在る人」と、比較的遅い成立とみられる迎敵祠篇に「屠酤者」とあるものが商人を指すことは言うまでもない。また『孟子』では、商人一般を指す用語として商（公孫丑上篇と下篇）と商賈（梁惠王上篇）が使われており、商賈という言葉が熟してきていること、及び賈單獨では價の意味（滕文公篇など）のみであるという『墨子』に近い傾向も見られることを指

摘でできる。

次に『荀子』。身分制的分割を均と至平の前提とする『荀子』においては、商と賈の例がかなり多く見られ、商人を表わす言葉として商・賈・商賈、及び賈人が使われるが、やや賈と商賈が多いという傾向がある。⁽¹³⁾ また盜賊同然の利の追求者であると商人の本質を表現した「賈盜の勇」(榮辱篇)と、より行商の意味を色濃く帯び始めた「商旅安んず」(王霸篇)に注目しておきたい。次に儒家の影響が強いとされる『呂氏春秋』では、この商旅という言葉が、一頭の牛に重車を引かせて遠く交易に従事する小行商の場合にも使われている(卷一九舉難篇)ことと、身分制的に賈を用いること(卷二六上農篇の農・工・賈)とともに、行商の意味を含みつつも商行爲を行賈と表現している例(上農篇)が注目される。

また法家の書『韓非子』ではそれほど例が多いわけではないが、五蠹篇の商・商人以下、商・賈・商賈は區別なく使われており、富賈(説林下篇)という『國語』の富商に對應する熟語があることと、本來的に客⁽¹⁴⁾異邦人である行商人を客商と稱していること(難二篇)を特筆できる。一方『商君書』では商と商賈の例がかなり多い。去強篇の「農・商・官の三者は國の常官なり」という文に端的に表われているが、身分制的には商が用いられている。『商君書』の身分制は、君主を頂點とし、その下に官、更にその下に農商が位置づけられる構造である。商も一定の地位を占めていると言いつたのであるが、同時に抑商の傾向も強い。『商君書』では、一字で商人を表わす時はほとんど商を用い、そのほかは商賈が多く(舉令篇など)、商人を使うこともある(舉令篇)とすることができる。『孟子』以來見られる商賈という言葉は、右の如き多くの用例を見れば、決して商と賈の二つに分けることができない、商人一般を指す熟語となつてゐることを知ることができる。

以上の諸書と『白虎通』引用の『易』『論語』『尚書』を通觀すると、地域毎に差はあつたであらうが、以下の如く述べることができる。

商民に由來する商は賈よりも早くから商人を指す言葉として使われ、庶人工商・士農工商のように身分制には商が用

いられることが多かった。一方、本來價を意味した賈は早くから鹽しほの意味をもち、『尚書』に見られるように商業・商人を指す言葉として使われ始めていた。『左氏傳』に見られるように、商行爲そのものを指す時は商ではなく賈が使われていた。正に、『國語』が伝えるような工商が官府に隸屬した時代、また『漢書』卷二四上食貨志上から窺われるような商工も耕地を有した時代、即ち工商が官府からも農からも獨立分化していない時代から、工とともに商が分化獨立し始める時代になると、未分化の時代以來の、且つ身分制的な意味あいの濃い商字とともに、次第に賈字が使われるようになったし、更には商字よりも廣く使われるようになった。こうして賈は商と重なりつつ、賣賈・商行爲全般、商人全般を指すに至った。そしてこの來源を異にする商と賈が早くから互用するともに、商人一般を指す熟語である商賈も使われるようになった。全般的にみて、商字と賈字は行商と坐賈を意味するということのように區別できないのであるが、商旅・客商のように行商の意味あいの濃い使われ方が商字についてなされることもあるし、また賈字の方でも行商を意味するものとして次節で述べる行賈という言葉を生み出すのである。

さて今までの検討には『管子』を残してきた。『管子』は周知の如く極めて取扱いの難しい書物であり、著作年代の幅も戰國初・中期から前漢代までと廣い。⁽¹⁵⁾ それにしても經言九篇から輕重一九篇に至る諸篇中の商と賈の例を見ても必要がある。なぜなら極めて重要な經濟・財政上の主張を含むからである。輕重以外の諸篇では、賈も使われるが商が多く、また商賈・商販・游商・商人などの例もある。最も古いとされる經言中の乘馬篇では、身分制的に商を使いつつ、坐賈的な市中の商とともに市外からやってくる賈の存在も見られ、また官賈に關する記述は『國語』の「工商は官に食む」と同様の事態を伝えながら、逆に官賈でない賈が多くなりつつあった狀況をも明らかにするものと言つてよい。

これに對してその成立が前漢武帝期に下るとされる輕重一九篇は明瞭な特異性を示す。商字は單獨で用いられることは舊商を含めても少なく、商賈・富商舊賈という賈字との熟語で用いられることが多い。極めて特徴的なのは、漢代文獻に頻出する富商大賈を富商舊賈と表現することであり、この舊賈は『史記』『漢書』では『漢書』食貨志下に管仲の言とし

で見られるだけであり、それも『管子』の引用と考えられるから、ほとんどこの輕重諸篇にのみ見られると言ってよい。籍字が税の意味で用いられているという特色とともに、この用語の特異性は輕重諸篇が一まとまりであることを改めて印象づけるのである。なお輕重全體では買、とりわけ買人を用いることが多い。そして輕重丁篇の如く商人・高利貸に直接的課税をし、農民を利そうとする發想があることも注目しておきたい。要するに『管子』はかなり古い時代の内容をもつものから、漢代の法制用語である買人（後述）を多用する漢代成立とみられるものまでを含む書物であることを、この商・買字の検討によっても確認できるのである。

漢代の書籍としては『淮南子』と『鹽鐵論』だけに觸れておく。武帝代成立の『淮南子』では、用例が少ないものの、身分制には商も買も使われ、同時に「買は肆を去らず」（卷一五兵略訓）の如く買が市の列肆で營業するのを本分とするような例があることに注目しておきたい。一方昭帝始元六年（前八一）の鹽鐵論議をもとに公羊學者桓寬によって編纂された『鹽鐵論』では、思想的にも財政觀・商業觀の上でも鋭く對立するにも拘わらず、大夫と賢良文學兩者の用法に大きな差はなく、ともに身分制には商を使い、一般的には買も使うが商買が多いのである（もつとも桓寬による潤色の結果かも知れないが）。そして復古篇の大夫の言中に「負荷の商」とある、かつぎ歩き、ふりうりの小行商人もまた商と表現されていることに注意しておきたい。

なお本稿では行商ぎようという日本語のイメージから離れるためにも、行商こうという言葉を上は多くの舟車を有した大行商から下は一車を引くもの、更には右のかつぎ歩き、ふりうりの類までをも含めて使いたい。つまりそのような移動移動によって商行爲を行う者全般と、そのような商行爲を指すタームとするのである。

二 『史記』『漢書』『後漢書』の商と買

まず司馬遷『史記』から。商業・商人に最も關係ある卷三〇平準書と卷一二九貨殖列傳では次のようである。平準書で

は、司馬遷が太史公曰で使った傳統的觀念に基く身分制的用法としての商を除き、商人一般を商賈・賈人とし、その富める者を富商大賈と表現している。また第四節で述べるように、商は前節で規定した如き行商を意味して使われている。次に貨殖列傳では、身分制的使用や商業一般を指す時に若干商が使われるが、また若干の商賈・富商大賈の例もあるが、概して行商を意味する行賈を含めて賈の例が多い。従つて貨殖列傳では商人・商業全般に賈が使われているとすることができる。但し賈人の例はない。

これ以外の各巻の用例は次のようである。商賈の例はあまり多くない。しかし「巴蜀の民或いは竊かに出でて商賈し」（卷一六西南夷列傳）のように動詞的に使われる例も見られ、この點、『漢書』卷二八下地理志下の「中國の往きて商賈する者多く富を取る」「商賈漁獵を好む」も同様の例である。また商は秦以前の敘述の場合などにごくわずか使われており、富商大賈の例も少ない。これらを除く大多數が賈・賈人であり、富賈の例もある。しかも卷一一八淮南衡山列傳の「重裝の富賈、天下を周流す」や、長安と蜀を往來する蜀の賈人（西南夷列傳）など、賈・賈人が明らかに行商を指す場合もあるのである。更に注目すべきなのは、卷一五、六國年表、秦始皇帝三三年（前二二四）の謫戍の記事、及び平準書の算緡令のように、詔書・法令乃至それを踏まえたものに賈人が使われていることである。つまり法制上の商人を指す用語は賈人ではなかったかと考えられるのである。これについての結論を出すのは今はやめて先に進む。

また卷一二二酷吏列傳の「湯の客田甲、賈人と雖も賢操あり、……また烈士の風あり。」も注目される。秦以來齊から關中に徙された田氏はこの地で商人として發展したが、この田甲もその一人であらう。司馬遷は田甲は商人ではあるが士人の風があったと述べる。『國語』や『荀子』で指摘された、あくことなき利益追求者という本質をもつ商人は、それ故に否定的な評價もつきまといやすい。そのような商人一般に比較して、田甲はその士風を特筆されたのである。換言すれば、たとえ富人であっても、また士風を認められても、彼が商人であることには變りがなかったのである。儒服を着た儒者、劍を身に帶び官吏たらんとした者、現役の官吏、地域に大きな影響力を及ぼした在地有力者、及び農工などとは異なる

る、誰が見ても商人であるとわかるものが服装や態度に表われていたし、またそのような形で人々は自他を區別し認識して生活していたものと思われる。このようにたとえ多くを兼業しているにせよ、主たる生業が何であるかによって社會的差異が生ずるのである。そしてこのような商人を蔑視する言葉として賈豎が使われた(卷五三蕭相國世家)。

以上、『史記』でも商＝行商、賈＝坐賈とは言えないことは明らかであるし、その用例には明瞭な傾向性を見い出せるのである。

次に『漢書』。百卷のうち八表と天文志に班固の妹班昭の手が入っているのは(後漢書)卷八四列女傳、百官公卿表上や各表の序などは既に出来ていたが、表の部分などに未完の部分があったからであると考え、ほぼ全卷班固の手になるものとして以下の考察を進めたい。『白虎通』の撰者班固であつてみれば、『漢書』においては商と賈の區別に十分留意しているという豫測が立てられても不思議はない。しかしそうは言えないというのが結論である。とは言え、その中にも『史記』とは異なる傾向もあるのである。

『史記』と記述が重なる場合、ほとんどそのまま『史記』の文を踏襲していて商と賈の字を改めるような例は見られない。『史記』に限らず、班固が合理的だと考えた文字の一定の改變があるものの、彼は概して依據した原資料をあまり改めていないようである。全體として、土農工と併記される身分制的用法には商が使われることが多いが、商人・商業には商賈・賈人・賈の用例が多い。食貨志上の「今法律商人を賤とするも」の如く、商人全般を指して商人を使うこともあるが例は少ない。一方賈及び賈人が行商を指している例は『史記』同様かなりあり、成都の羅哀が「京師に賈あきないした」(卷九一貨殖傳)のはその一例である。また西域からの商人を行賈と表現した例もある(卷九六上西域傳上)。法制上の用語は賈人が多いが次節でまとめて検討する。このほか『漢書』で注意すべきことは次の二點である。

第一は、賈の多様な用例中にあつても、『淮南子』にあつたような、市での營業者をより強く示すような用例が卷六七胡建傳の「賈區」や卷七六張敞傳の「百賈」などに見られることである。第二は復古による革新を行おうとした王莽代で

の用例である。概して王莽代の商人の記述には商が用いられるが、食貨志下の

(山澤の産物を採取する者、牧畜する者、女子の布帛や衣類を作る者、工醫など諸々の技能技術者、及び) 商販・買人は肆列・里區・謁舎(のどこに)坐しても、皆各自ら爲す所をその在所の縣官に占せよ。

の例が注目される。商販は『管子』八觀篇では商行爲を意味したが、『漢書』卷九〇酷吏・尹賞傳でも作務(手工業)に對して商行爲を指して用いられている。『後漢書』では、「常に商販を通じ」(卷七六循吏・孟嘗傳)のように商行爲の意味が濃い例もあるが、「寵愛する所、おおむね商販の庸兒多し」(卷七三公孫瓚傳)のように商行爲を指している例もあり、やはり漢代では商販は商行爲を意味することが多かったものと思う。従つて食貨志下の商販も同様の意味であり、買人に對する行商を特に意味しない。それ故、買人が後述の如く專業商人を指す法制上の用語であるから、それとは別の廣く「商行爲を行ふ者」とすべきである。これは法令そのものであるから、王莽代も法制上の用語として買人を用いたとしてよいであろう。但し始建國二年規矩獸帶鏡銘の「買人は市を事とし、不財は田を齎す」(19)の場合は、やや坐賣の意味あいが濃いが、市を「あきない・うりかい」とすればやはり商人一般を指している例としてよいであろう。

次の『後漢書』も基本的に『史記』『漢書』の傾向と異ならず、商賣が最も多く、次いで買・買人が多い。そのような中であつて、商販に比べてより行商の意味が強い賣販があり(卷四三朱暉傳など)、中國人で外國貿易に従っている者を買客と稱し(卷八九南匈奴傳など)、逆に西域からの胡人商人については買胡(卷二四馬援傳など)という言葉が定着し、行商を指す行賣に代つて行旅(卷七六循吏・孟嘗傳など)が使われ、唯一の商人の例は行商の意味で用いられている(循吏・王渙傳)ことなどを指摘できる。

11

このように三史を通覧した時、その用法にそれぞれ特色が見られるものの、商人・商業を指す場合、多く商賣・買人・賣が用いられ、商・行商、賣・坐賣という區別はなされていなかったのであり、『白虎通』の質問者がこの區別を疑問としたのは當然であつた。まして次に述べるように、漢代法制用語では買人を用いているという現實に立つた時、質問者の

疑問は漢制との矛盾という形で一層強まらざるをえないのである。

三 法制上の用語

まず秦代の法制上の商人・商業を表わす用語を雲夢睡虎地秦墓竹簡について考えてみたい。結論的に言って、それには「賈」が使われており、また價直を意味する時に多く「賈」が使われている。⁽²⁰⁾ 賈の例のみを次に挙げたい。

秦律十八種金布律に「賈市居列者」とあり（二三五簡・五七頁・H五三頁）、「賈市し、列に居る者」か、また「賈市して列に居る者」か、あるいは「賈居市列者」（「賈の市列に居る者」）の誤りなのか問題があるが、他の例も参照して最初の読みをとる。⁽²¹⁾ また秦律十八種司空律に「作務及び賈にして責（債）を負う者は代るを得ず」とあり（二〇〇—二〇七簡・八四・八五頁・H六七—六九頁）、手工業者たる作務に對して商人を賈としている。なお漢代の用例もあわせ考えると、秦漢時代、この作務・作は、職務的・職能的に用いられている工・工人に對して、法制上・身分的に手工業（者）を指した言葉であつたのではなからうか。また法律答問に「客未だ吏に布さざるに（當地の商人などと）與に賈すれば、賈一甲とす」（五五四簡・二三〇・二三一頁・H一七四頁）とあるのは商行爲を指した例である。

なお爲吏之道の中の魏戶律及び魏奔命律中の「段門逆呂」「段門逆闕」（六九四簡五段—七〇六簡五段・二九二—二九四頁・H二〇八—二一〇頁）の段（假 *kãg*）は賈の二音のうち價直の意の力（*kãg*）とは音で對應するが、*u*（*kãg*）とは對應せず、賈の音通とはし難い。戶律の文の前後關係を見ると、「贅壻後父」が「人の孤寡に入り、人の婦女を徴む」に對應している以上、「假門逆旅」は「邑を棄て桼に居る」と對應する筈である。「門を逆旅に假りる」とは読み難く、假門と逆旅という二つの名詞と考えられるから、これは他家あるいは邑外の山野等居住者と、旅館をめぐらとする遊民とを指すものと思われる。

くり返すが、秦代の法律上の商人・商業を指す用語は賈であり、價直の場合には賈が用いられているとすることができ

る。この點、『商君書』では秦の法律用語たる賈よりも商・商賈を使つており、たとえ色濃く當該時代の諸制度を反映した書物であるにせよ、一つの主張をもつ思想の書は必ずしも現實政治とはストレートに結びつかないのである。

ところで前述の如く始皇帝三三年の謫戍には賈人が使われており、商人を指す場合、賈一字よりも賈人を使うようになったと推測される。これはあるいは秦王政二〇年（前二三七）乃至その直前頃に行われたと推定される法制・官制の改編⁽²³⁾と關係があるかも知れない。つまり商鞅以來の秦律に一定の改編整備が加えられた時、商人を指す用語として賈人が選ばれたのではないかと考えるのである。

漢代に入ると事情はより明瞭である。まず『史記』平準書に「高祖乃ち賈人をして絲^{きぬ}を衣^き、（馬）車に乗るを得ざらしむ」とあり、これは『漢書』卷一下高帝紀八年（前一九九）の「賈人は錦繡綺縠紵紩を衣、兵を操り、騎と馬（車）に乗るを得る母れ」と同じであり、詔令の節略文である。また『漢書』卷四九鼂錯傳の賈人は始皇三三年の謫戍と同一内容のものを傳えており、錯は秦の詔令を踏まえた筈である。但しこの賈人は具體的には有市籍という限定がつくものであり、この點、同卷七二貢禹傳の「孝文皇帝の時、……賈人・贅壻及び吏の賊に坐する者は皆禁錮し、吏と爲るを得ず」も同様である。また卷一一哀帝紀綏和二年（前七）の限田奴婢策の「賈人は皆田に名づけ、吏と爲るを得ず。犯す者は律を以て論ず」は詔令中の例である。ただこの場合は、儒學の影響が極めて濃くなった前漢末であり、先の王莽代の賈人と同様の專業商人全般を指しているとみられ、武帝代の算緡令では有市籍の賈人とその家族が新たに土地を所有して農民となり算緡令から逃れることを禁止した（次節）のに對し、專業商人全般に土地所有そのものを禁止するに至っている。これは官たりうる者が豪族⁽²⁴⁾知識人となり、商の地位が低下した、また次に述べる二業の禁が強く意識されるようになった時代状況を反映したものである。

後漢初年、桓譚は「是を以て先帝、人に二業を禁じ、商賈を錮して、宦^{つか}えて吏と爲るを得ざらしむ」（『後漢書』卷二八上本傳）と述べている。『後漢書』の上奏文ではこれ以外の箇所でも商賈を用いているが、李賢註引『東觀漢記』ではこの

二業の禁の部分に缺くものの商人を批判するほぼ同文があり、それには賈人を用いている。劉宋・范曄『後漢書』の原史料の多くは『東觀漢記』に負っているという兩者の史料性格を踏まえると、桓譚上奏の原文では當時の法制用語たる賈人を用いていたが、范曄がそれを商賈に改めたという可能性が生ずる。そしてこの「先帝」を李賢註では高祖とするが、具體的には哀帝を指し、右の哀帝紀の詔令を二業の禁としてとらえていたものと思われる。また『後漢書』卷八〇上、文苑・黃香傳の

延平元年（一〇六）、魏郡太守に遷る。郡舊内外の園田あり、常に人に與えて分種せしめ、穀を收めること歳に數千斛。香曰く「田令、商う者は農せず。王制、仕える者は耕さず。伐冰食祿の人、百姓と利を爭わず。」と。乃ち悉く以って人に賦^{わふ}ち、課して耕種せしむ。⁽²⁶⁾

とある田令を問題にしなければならない。この王制は『禮記』王制篇であり、伐冰は『禮記』大學篇を踏まえている。問題はこの王制と對になっている漢代の田令の原文に、果して「商者」が使われていたか否かである。これは二業の禁に關わり、右の桓譚は官商の兼業禁止を述べているが、『後漢書』卷三九劉般傳には「是の時、令を下して民に二業を禁ず」とあり、明帝永平一七（七四）・一八年頃の詔令の存在と、有田者が漁捕することもできないというその適用のゆきすぎが指摘されている。この明帝の詔令の主眼點が農商の兼業の禁止にあったことは明らかである。そしてこのような官商・農商の兼業禁止は溯れば直接的には先の哀帝紀の限田奴婢策の詔令にゆきつく。従つて田令の原文には、本來「賈人は皆田に名づくるを得ず」とあったが、黃香はそれを王制の要約文と對にして「商者不農」と要約して表現したものと思う。

また『續漢書』輿服志上の車制には「賈人は馬車に乗るを得ず」⁽²⁶⁾とあるが、これは高祖時代に禁止され、その後恐らくは惠帝・高后代にそれが罷められたが、少なくとも後漢代にはまた賈人の馬車乗用が禁止されたことを示すものである。これと、同輿服志下の公主以下嫁娶服色規定の「賈人は緇・縹のみとす」^{あき はなだ}は、禮制に關わるものの、後代の服制令等を參照すれば、律令文をほぼそのまま使用していると思われ、これまた法制上の商人の稱呼は賈人であるということを證す

る。

以上の諸例のみならず、明確に「漢律」として引用されているものがある。それは『漢書』卷二惠帝紀六年（前一八九）の女子不嫁五算の條の後漢末應劭の註である。

應劭曰く、……漢律『人ごとに一算を出だし、算ごとに百二十錢とす。唯だ賈人と奴婢とは倍算とす。』今五算たらしむるは之を罪謫するなり。

この漢律が後漢代のものであることは動かないにしても、更に前漢代まで溯りうるか否かはわからない。ここで應劭はこの倍算を女子不嫁五算と同様、いわゆる罰算と解している。部分的にせよ奴婢解放をその草創期に行った後漢王朝にとつては奴婢も人間であることに變りはなかったが、同時に彼等はその人間の本分を離れて、いわば人間であることに最大の價值がある物として私人に私的に從屬して公的世界から離脱した存在ともとらえられていた。また後漢は二業を禁じ、本農を旨とするのであるから、末作に従う商人もまた人としての本分から離れた存在である。ここに人としての本分から離れた奴婢と商人を倍算とする理由がある。従つて奴婢は物として二倍に評價されたのではないし、奴のみならず婢も同様に罰算の對象であつたということを確認しておかねばならない。また商人の場合は、市中の坐賈はともかくとして、多くの商人が移動による商行爲を不可避とし、日常的算役徵收に支障があつたために通常の倍にしたという現實的理由もあつたであらう。また『周禮』天官冢宰「九賦」の鄭玄註に「（關市・山澤・幣餘は）皆末作、當に賦を増すべき者で、今の賈人倍算の若し」とあるのは右の律文を踏まえたものである。鄭玄は九賦を錢納の人頭税と理解しており、七の關市の賦以下は末作者の人頭税であり、今（後漢）の商人同様賦を増すべきものとしたのである。

以上、漢代の法制上の商人を表わすタームは秦の賈・賈人を受けて、賈人であつたということを明らかにしたものと考える。ここに至つてようやく平準書の算緡令中の商と賈人の考察が可能になった。次節でその検討を行いたい。

四 算緡令の商と賣人

『史記』平準書中の算緡令の記事を次に引用する。

(a)是に於いて公卿言えらく。(b)郡國頗る菑害を被り、貧民の産業無き者は、募りて廣饒の地に徙す。陛下膳を損じ、用を省き、禁錢を出だして以って元元を振わし、貸賦を寛くす。而るに民齊しく南畝に出でず、商賈^{ますます}滋衆し。貧者は畜積有ることなく、皆縣官に仰ぐ。(c)異時、軺車と賣人の緡錢とに算(算)すること、皆差ありき。(d)請うらくは算すること故の如くせん。(e)諸の賣人と、末作・貰貸し、買いて邑に居き、諸物を稽^{たぐ}え、及び商して以って利を取る者とは、市籍無しと雖も、各、其の物を以って自ら占せしめ、率緡錢二千にして一算とす。(f)諸の作にして租あるもの、及び鑄るものは、率緡錢四千にして一算とす。(g)吏比者と三老と北邊の騎士に非ざるものの軺車は以って一算とし、商するものと賣人の軺車は二算とし、船は五丈以上を一算とす。(h)匿して自ら占せざるものと、占して悉さざるものとは、邊に戍すること一歳とし、緡錢を没入す。(i)能く告ぐる者有れば、其の半を以って之に畀^{あた}う。(j)賣人の市籍有る者、及び其の家屬は、皆籍して田に名づけ、以って農を便とするを得る無かれ。(k)敢えて令を犯さば、田僅を没入⁽²⁷⁾す。

この令は財産税、商人が受けた身分的制約、市籍などの解明にとって最も重要な史料の一つであり、それだけに多くの研究があり、とりわけ平中岑次氏はこれに對して逐一詳細な考察を加えた。⁽²⁸⁾しかし平中氏も商と賣人については序引用の加藤繁氏の說に従っている。改めてこの商と賣人の區別を考察し、更に行論に必要な範圍内で算緡令そのものの解釋を行っておきたい。なお既に拙稿「中國古代の商人と市籍」で述べたことは繁を避け觸れない。

この令は公卿の上奏の形をとっているが、平準書のこれ以降の記述を見ても、それが實施されたものであることは問題がない。平準書には原詔令をもとにしたとみられるものがあるが、これ⁽²⁹⁾も提案段階のものではなく、原詔令をもとにした

ものと思われる。その原詔令は、

丞相(李)蔡・御史大夫(張)湯言、「制曰、『……』謹與大農令(顏)⁽³⁰⁾異等議曰、『郡國頗被舊害、……敢犯令沒入田
僅。』制曰可。

というようなものであったと考える。

さて前節まで述べた所によれば、商賈は決して商と賈の二つを指すものではなく、商人一般、あるいは商行爲を指す熟語であつたし、漢代の法制上の商人を指す用語は賈人であつた。また平準書では商人一般を商賈・賈人と稱することが多かった。従つてこの算緡令中の、法案提出の前提諸状況を述べた(b)部分にある商賈も商人一般を指したものと考へてよい。そして高祖時代の法令を踏まえた(c)と、提案された法令である(e)以下では、確かに法制用語である賈人を用いているのである。問題は(e)と(g)にある商である。この商は、同じ平準書では卜式の言中に「船に算あつて商者少なし」とあり、また『漢書』卷六武帝紀元光六年(前二九)の「商車に算す」や、前述の『鹽鐵論』の「負荷の商」、また時代は降るが應劭『風俗通』卷九怪神「鮑君神」の「商車十餘乘」などを見ると、上は數十から數百の車や多くの舟を用いた大行商から、下は一車、あるいはふりうりの類までも含めた移動による商行爲及びそれを行う人を指しており、大小、專業であるか否かを問わない行商を意味している。但しこの意味で商一字を使う例はここに挙げたものくらいでごく少ないことも確認しておかねばならない。それにしてもこれらの例により、專業商人たる賈人が行商した場合、その行爲乃至その人を商とも呼んだし、また專業でない者の行商行爲をも商と呼んだと押えることができるであらう。このような用法を踏まえて算緡令でも商が使われていると考へてよい。賈人が坐賈・行商に拘わらず專業の商人を指すのであるから、この(e)(g)の商は具體的には專業以外の者による行商を指していると考えられる。

言うまでもなく、法令が制定されるについてはそれを必要とする諸状況がある。今ここで當時の商業の實態論に踏み込む餘裕はないが、私はこの算緡令は專業の商工業だけを對象としたものではなく、前漢初期の江陵縣を中心とした商業に

見られたような⁽³¹⁾、大家から貧民に至るまでの各層によって行われた多様な商業活動をも対象としたものと考えられる。それ故、專業の商人のみならず、末作から商に至るまでの商行爲によって利を得た者も、たとえ營業登録をしていなくてもその營業資産を申告させたのである。なお專業の商人以外で市での營業登録をした者の例は『漢書』卷八六何武傳の武の弟顯に見ることができ、二業の禁が厳しくなる時代以前は、社會的に非難されることがあったにしても、それが可能であったのである。一方專業の商人は行商・坐賣を問わずほとんど營業登録をしていたものと思われる。行商の場合、もし營業登録をしていなければ、行商のために縣からパスポートを發給してもらうにも支障が生じたであろうし、前引法律答問に見られたような旅先で商取引を行う前の吏によるチェックの際にも支障があつたであろう。それに對して里居の富人が行う高利貸などの場合は登録しない者が多く、把握し難かつたであろう。しかしこの算緡令はこのような者をも対象としたのである。この點、前引『管子』輕重丁篇の主張と合致することを注意したい。

従つて現在の專業商人については改めて「有市籍者」であるか否かを記載する必要がないのであるが、(j)で賈人のうちの「有市籍者」という限定を附して、「登録して土地を所有し、農民となることの方を便とすることを禁じた」のは、本貫地の戸籍を失つて市籍上に「市居住」と註記された者を特に指した、というのが私の考えである。この私見を堀敏一氏は「實證されていないと思う」と批判している。確かに私見の實證は將來の新出史料に待つ所が大きい⁽³²⁾が、七科謫によつて現在營業登録をしている專業商人を全國的に徵發したならば、いくら專業商人以外の登録者があつたにしても商業の壊滅的な打撃となつた筈であり、そのようなことを行ひえたであらうかと反問できよう。更に最近では陶文や漆器銘文の増加によつて市外の里に居住する多くの自由工人の例も知られており、專業商人でも市外の里に住む者がかなりいたもの⁽³³⁾と思う。一般的に、里居住の者は郷戸籍につけられ、縣—郷—里というラインによつて把握され、一方、市は長安等の大市の場合は縣の令・長と同格の市令・長の下に、また多くの縣城中の市の場合は、縣直屬の市吏あるいは市官と稱される市擔當官があり、市掾や市嗇夫がその長で、市籍を管理し、その下で列肆の商工等は把握され、列長乃至伍長も置かれた⁽³⁵⁾。

市官は市籍によって商工等を把握し、申告納税させるともに、「市居住」の者も把握したのである。彼等「市居住」者は市籍にしか名が載っておらず、いわば郡縣制的支配の枠外の人間であった。その中でも特に商人が強い差別を受けたのである。⁽³⁶⁾

なお輜車は前漢代では乗用の馬車一般を指したが、前述の如く、商人は高祖時代にそれに乗ることを禁止され、その後再び乗ることができるようになった。この算緡令以降は二算の税を出さねばならなかったが、變ることなく乗ることができたのである。しかし後に再び乗車を禁止された。さて行商に従う場合、その荷物は主に牛や人間が引く商車に載せたが、乗用として輜車を用いることがかなりあったので、行商をする者からも二算を徴したのである。また吏比者は官吏待遇の者で、第九級五大夫以上の爵を有する者、比二千石以上の官位に就いたことがある者、及び王杖保持者などを指す。つまりこの吏比者や三老・北邊の騎士以外の一般民は輜車一車につき一算の税を納めたのである。

算緡令についてはこのくらいにするが、法令上の商人を指す言葉は買人であり、少ないながらも商字が行商を意味することもあるということを押えて次に進みたい。

五 『白虎通』商賈篇と鄭玄註の意味

確かに商が行商の意味で使われることもあり、また賈が坐賈の色彩の濃い使われ方をすることもあるが、それは少なく、大部分は區別し難いし、更に法制上の商人を指す言葉は買人であるという、商字と賈字の使用實態及び漢制との食い違いにも拘わらず、なぜ『白虎通』では強辯してまで商＝行、賈＝止としたのであろうか。これが本節の問題である。この區別を強調し、それを定着させたのは鄭玄であり、『周禮』天官冢宰「九職」に「行を商と曰い、處るを賈と曰う」と註し、地官司市では「物を通ずるを商と曰い、居りて物を賣るを賈と曰う」と註し、賈公彥疏は絶對的にこれに従っている。このほか『漢書』卷二八下地理志下の「五民」註に、

服虔曰く、士農商工賈なり。如淳曰く、遊子その俗を楽しみ、復た歸らず。故に五方の民あるなり。師古曰く、如說是なり。

とある、服虔『漢書音訓』を擧げることができる。これは必ずしも商Ⅱ行、賈Ⅱ止の主張とすることはできないが、両者が明瞭に異なることの主張であることに變りはない。そして古文學の定礎者鄭玄は言うまでもなく、この服虔も『春秋左氏傳解詁』があるのみならず、『公羊墨守』の何休に對しての論戰の書『春秋左氏膏肓釋癰』などを著した左傳家・古文學者であつたということを忘れてはいけない。

『白虎通』商賈篇理解の鍵はここにある。なぜなら彼等古文學者と今文學者との最も鋭い對立點は『左氏』と『公羊』にあつたし、また『周禮』も何休によつて「六國陰謀の書」とされたのであるが、實はこの二書にのみ明瞭に商と賈を分けた記述があるからである。このうち『左氏傳』宣公二年の「商農工賈」は決して商Ⅱ行、賈Ⅱ止を示すものではないことについては既に述べた。しかしこの商と賈を分けた記述は、『左氏』の徒にとつては、この両者が明確に異なるものである、あるいは異ならねばならないと考えさせるに十分なものである。そして『周禮』地官司市でも、

商賈を以て貨を阜おほいにして布を行し、……朝市は朝時にして市し、商賈主たり、……凡そ市の僞飾の禁は、民に在る者十有二、商に在る者十有二、賈に在る者十有二、工に在る者十有二。

と、商と賈を分けて記述しているのである。『周禮』ではこのほか若干の商と賈の例がある。まず天官序官の「賈八人」はいわば官賈である。また天官冢宰「九職」の「六に曰く商賈。貨賄を阜通す」は商人一般の稱呼として先秦から漢代に至るまで使われる商賈の例と合致する。一方地官司市の場合、身分ではなく職務について、農・工・衡などと分類した中に、「商に任ずるに市事を以てし、貨賄を貢さしむ」と商を擧げるが、これは商人一般を指す。そして冬官考工記に「四方の珍異を通じて以て之を資す。之を商旅と謂う」とあり、鄭玄は「販賣の客なり」と註している。確かに行商と解しうる文面であるが、王公以下の六職の一つとして擧げられているのを見るならば、商人一般と解しうる餘地がある。

この商旅という言葉は、『左氏傳』『荀子』『易』『呂氏春秋』を通じて、次第により行商的な意味で使われてきたが、特に『左氏傳』と『周禮』において百工と對比して用いられている點が注目され、兩書の經書としての地位の確立とともに魏晉以降使用例が多くなるのである。

このように『周禮』における数少ない商と賈の用例について見ると、商⇄行、賈⇄止という區別はなされていないし、また司市の例もそのような區別を明瞭に示すものではないが、あたかも別のものである如く商と賈を分けていると言えよう。『周禮』自體先秦に溯る古いものを含むにせよ、書物としてまとめられたのが前漢後期であり、一方『左氏傳』は漢初の張蒼・賈誼以來の傳承があるにしても、前漢後期にその受業者が増え、とりわけ劉歆がその顯彰、及び以後の師傳の上で大きな役割を果たしたことなどを考慮に容れるならば、あるいは劉歆などの手によって『左氏傳』と合致するように『周禮』に商と賈を分ける一文がつけられたとも推測できないこともない。またやはり原司市（37）でも分けて記述していたかも知れず、決め手はない。しかし『左氏傳』と『周禮』に各一か所、商と賈を分けた記述があるという事實だけは動かし難いものとして残るのである。當然古文學者はこの區別が何に基くものであるかを説明しなければならない。しかも既述の如き先秦以來の兩字の使用狀況があり、漢の法制上の用語は賈人であるという現實がある。この現實との調整に迫られた時、多くはないが商字が行商を指し、一方では市中の商人の場合に賈を用いる傾向も若干あるという事を據り所にし、更にそれを權威づける爲に『易』『論語』を引いて商⇄行、賈⇄止を主張したのが『白虎通』商賈篇であると思う。従ってこれは古文説に立脚したものであると言わねばならない。別稿において『白虎通』はおおむね今文説によるとされるが巧みに古文説が加えられている所があると述べたのは、この商賈篇を考慮に容れてのことであつた。班固自身、『周禮』や均の理念を背景として彼獨自の理想的周制をその『漢書』食貨志上において示し、以後『漢書』は廣く思想の書としても受入れられてゆくという思想的位置に立つが、このように『白虎通』においても古文説の受容とその後代への影響という同様の思想的位置を認めることができるのである。

こうして今文説と古文説の對立の場であつた白虎觀論議において、古文説は『周禮』と『左氏傳』で明確に商と賈を分け、且つ『易』『論語』がそれを支持するということ、この商字と賈字の解釋においては、漢代の現實を踏まえ『尚書』を引いて反問した反對者に勝利を収めたのである。つまりこの商賈をめぐる議論の主題は表に現われていない『周禮』と『左氏傳』であつた。従つて『白虎通』の記述も、單なる漢儒のこじつけではなく、こじつけざるをえない思想的意味があつたのであり、この點、後漢の學者の解釋をこのような目で再検討する必要があるものと思う。そしてこの『白虎通』による方向づけは以後大きな影響を與え、服虔などの古文學者によつて強く主張され、鄭玄によつて經書解釋學的にはほぼ定説化するに至つた。この間、文字學の上で定礎となる許慎の『說文解字』があるが、そこでは商と賈はどのような説明されているであらうか。

貝部で、「賈は市なり。貝に从いて而聲。一に曰く、坐して賣售するなり」「商は行賈なり。貝に从いて商の省聲」とし、尙部で「商は外よ從り内を知るなり。尙に从い章の省聲」とする。このうち尙部の商字の説明は『白虎通』の遠近有無をはかるとするのに對應するが、問題は貝部の賈字である。許慎は賈を市_二商行爲と解して「一曰」以下の六字を加えている。この六字を段玉裁は、『說文』には售字がなく淺人の妄増であること、また坐賣とするのはおかしく、鄭玄『周禮』註の「居りて物を賣る」は物を居積したまたそれを賣る意味だとし、楊承輝氏もそれに従つてゐる。⁽³⁹⁾この部分が本來「一曰坐賣也」であつたか、それとも全てが妄増であつたかは解決し難いにしても、賈を市とし、商を行賈とする許慎の説明の意味を考えておく必要がある。

許慎(？—一二四？)は五經兼習、今古兼習の學者で、古文家賈逵について學び、その主著『說文解字』はほぼ和帝永元一二年(一〇〇)に完成し、また後に鄭玄の駁をうける『五經異義』を著し、更に『淮南子』にも註をつけている。⁽⁴⁰⁾このうち『淮南子』註は概して短かく、言葉の意義と、人名・地名を主とした小學家的註と言へる。また『異義』においては、漢制と『周禮』『左氏傳』の制度が合致することを述べる所があるとともに、漢制に比べて『周禮』の制度が悪いとする

(41) 所もある。概して今・古文説の違いを古文説の立場から論じたものであるにしても、そこには經傳の文を經傳で説明する今文・古文兼習の姿勢が貫かれるとともに、彼の生きた時代、即ち「太平」であると多くの人々に認識された後漢前期という時代⁽⁴²⁾に合致した、漢制を是とする態度があり、『周禮』を漢制を超越するための理想的な制度の書であり「禮の經」であるとした鄭玄とは明確に異なる。鄭玄の『駁』は、古文を中心としつつも今文・古文兼習の態度をくずさず、道家の書にも註をつけるような許慎の學問態度そのものを批判することを意圖したものかも知れない。このような許慎の學問態度は『説文解字』にも貫かれているものと思われる。彼は古文家として白虎觀論議の商_二行_一説に従い、商を行_二賈_一とした。そして賈については、もし「一曰坐賈也」がもともとあつたとすれば、古今の書に通じ、また漢律にも通じていて、賈を坐賈に限定できないことを知っていたが故に、賈を商行爲（及びそれを行_二者_一全般）を指すタムとしつつ、白虎觀論議の賈_二止説_一を「一曰」という形で加えたものであろう。また商を行_二賈_一と表現すること自體、商よりも賈の概念の方がより廣いことは明らかなのである。

このような班固・許慎の時代に對して、現實の混亂の中で、逆に「太平」を求めざるをえなくなった後漢後期、公羊墨守の何休を軸として激しい論戰を展開した服虔・鄭玄にとっては、古文家であることにより、徹底せざるをえず、そこに益々強く商_二行_一、賈_二止説_一を主張する理由があつたものと思う。そして『周禮』の時代⁽⁴³⁾の理想を指し示した鄭玄註の權威性は、經學的にはほぼそれを定説化させたのである。

餘論 中世における商と賈

序で提起した商字と賈字が中國古代の各書籍でどのような傾向性をもって使われているかという問いに對しては、その來源を異にする商、賈ともに商人そして商行爲（特に賈）を指す用語として使われており、商_二行_一、賈_二止_一という區別はなされてないが、商字と賈字を使う熟語を加えて考えると各書籍にかなりはっきりした傾向性を見ることができ、それに

基いて解釋しなければならないし、とりわけ秦漢時代の商業・商人を示す法制上の用語は賈・賈人であり、それと對比して專業商人であるか否かに拘わらず行商を商と表現することもあったと結論できた。そしてこのような現實にも拘わらず『白虎通』などにおいて商Ⅱ行、賈Ⅱ止説が主張された、あるいは主張されねばならなかったのはなぜかという問いには、『左氏傳』と『周禮』のみに明確に商と賈を分けた記述があり、これをめぐる今文・古文の對立が背景にあったことを明らかにしたことで答えたものと考ええる。このように商業・商人をめぐる稱呼の變遷には言葉そのものが引き摺ってゆく傳統的慣習的側面のみならず、法律・官廳用語との關わり、そして思想的影響もあったのであるが、商・賈字の中世における展開をごく簡単に概観して本稿を終えたい。

仁井田陞氏の『唐令拾遺』（一九三三年）に戸令の文として引かれる『大唐六典』卷三尚書戸部、戸部郎中員外郎の條に、天下四民の一つとして士・農・工とともに「屠沽興販する者を商と爲す」と商を擧げている。その註に「工商とは皆家その業を専らにして、以って利を求める者を謂う。その織紵組紃の類は非なり」とあり、農民等が行う家内手工業を除く專業者であることを明言し、この專業商工は「工商の家は土に預るを得ず」という續く規定によって、九品以上の官位をもつ官人となることを認められていなかったことを明言している。農工商ともに庶とされながら、工商にはこのような仕官制限が加えられていたのである。この規定は『隋書』卷二高祖紀下、開皇一六年（五九六）六月甲午の「工商は進仕するを得ず」という制詔に溯る。この例からほぼ隋唐代、商人と工人を表わす法制用語は商と工であったことを知りうる。

つまり漢代の專業商人を指す賈人に對して、隋唐代では同じものを商と呼んでいた、という變化をそこに見い出せるのである。この商字を用いているということは、先秦以來士農工と對比する身分制的用法の場合には商を用いることが多かったという傳統につらなるものと言えよう。と同時に、隋唐代においても、商Ⅱ行、賈Ⅱ止の區別をあまり明確にしない商・賈・商賈・賈人などの例が多見し、それはこの專業商人全般を商とする法律規定そのものに明らかである、という實狀も把握しておかねばならない。問題は漢の賈人から隋唐の商に至る法制上の用語の變遷である。しかし三國から隋に至

る諸史料を通觀しても確たる結論は出せず、推測を述べるほかないのであるが、以下のように考える。

『周禮』と鄭玄註の權威性が「『周禮』の時代」に絶大な影響を與えたことは言うまでもない。魏晉以降、工を『周禮』考工記六職の一たる百工という用語で表現するようになったことはそれを證する一事實であらう。そしてこの百工と對比される司市の商賈という用語が、漢代の賈人に代つて使われたのではないかという豫測が立てられる。事實『三國志』では商賈がやや多く、賈人・商旅・商販の例がそれに次ぎ、『晉書』でも商賈がやや多いものの、商が身分制的に多く使われているという特色があり、その間、商販・賈商・商客・賈客・商旅も見られる。しかし商賈が多いのは漢代でも同じであり、先秦以來の商人一般を指す商賈が、いわば傳統的慣習的に用いられていたとした方がよいと思われ、法制用語であるという結論は出せない。『宋書』以下の南朝史料では、賈商・賈客・商賈・賈販・賈人・行賈などの賈字の熟語が見えるものの、それと同程度、あるいはそれ以上に商・商人・商旅・商販が多くなる。これは北朝もほぼ同じで、賈胡・商胡・屠沽・商販・賈客・賈人などもあるが、「工商阜隸」の如き『左氏傳』（襄公二十四年）の用語そのままに、身分制的に商・商人を使うことが多く、いわゆる良賤制という身分制形成の過程で、商人身分を規定する際に身分制的傳統につらなる商字が選り取られた可能性が高い。駢儷文と修辭で飾られた南朝の詔令等からは、果して法制用語として既に商が使われていたのか否かを探ることは容易ではない。しかし全體として魏晉期に比べて變化が見られると言うことはできるがそれ以上は何も言えない。この點、北朝でももう少しはつきりさせうる。

晉代、庶民を指した法制上の身分制的用語である「士卒百工」という言葉、及び「百工伎巧」という表現は北魏の初め頃には使われるが、ほぼ高祖孝文帝の頃には見られなくなり、「工商吏民」のような表現をする例が多くなる。これに注目すると、甚だ荒い推測であるが、ほぼ馮太后攝政時代（四六五—四九〇）の頃に、西晉律令を直接繼承した律令に手直しが加えられ、工人商人を工商と稱するようになったと考えられる。『魏書』卷四四賈于傳に「商賈部二曹令に遷る」とあり、これは孝文帝即位（四七二）以前の文成帝（四五二—四六五）頃のことである。嚴耕望氏はこの二曹が尙書省の曹である

とすれば、金部尙書乃至左民尙書に属したものであらうとする。⁽⁴⁶⁾その所屬及び職務を確定し難いものの、商業・商人に係るこの二つの部局が、商部曹と買部曹という名稱であったということが重要である。これは、北魏初期その法令の多くを西晉律令に負い、それ故先の「士卒百工」のように西晉律令の用語を繼承したが、ほぼ馮太后攝政時代に變えられたという想定に立つならば、北魏初期の商人を示す用語は商賈であり、馮太后以後商が用いられるようになったとすることを可能にするし、更には西晉律令においても商賈を用いていたということを可能とするものである。これを踏まえる以下の如くなる。

魏は鄭玄註を強く意識して法制用語としては商と賈を區別しつつ商賈を用い、それ故『漢書』卷二八下地理志下「六郡良家子」で如淳が「醫・商賈・百工は豫るを得ざるなり」と註し、西晉泰始律令はこの魏制を繼承した。ところが南北朝時代にはより身分制的な位置づけを明確にするために士農工商という先秦の諸書に見られた觀念の影響を強くうけて商を用い、隋唐はそれを繼承した。それ故『文子』の二五等人説、隋・蕭吉『五行大義』、及び敦煌文書『二十五等人圖』⁽⁴⁷⁾においては、工人・農人に對して商人を用いているのであり、『五行大義』(卷五論諸人)の如きは「商人とは、負販・市埵もて、隨時貨を鬻り、貴賤相い易え、以って産業に資す。此れ商人なり。また賈人と曰うなり。」と商人≡賈人とし、商≡行商、賈≡坐賈説を無視しているのである。また唐・慧琳『一切經音義』で、多くの商・賈の説明に鄭玄註を引きつつも、卷五九では「今皆商なり」と述べ、唐では行商・坐賈に拘わらず商と言うことを明言したのも同様である。經學においては賈公彥疏の如く鄭玄註が絶對的に信奉されたにせよ、現實はそれとは大きく異なっていたのである。但し理念的には絶えず大きな影響を與え續けたのではあるが。

註

(1) 加藤譯註『史記平準書・漢書食貨志』一九四二年、四二頁。

(2) 宮崎「賈の起原に就いて」(一九四〇年初出、『アジア史研究』二、一九六三年所收)。

- (3) 陳立『白虎通義疏證』卷七を参照して文字を改めた所がある。
 - (4) 紙屋正和「前漢時代の商賈と絹錢令」(『福岡大學人文論叢』一一二、一九七九年)。
 - (5) 小島「原商」(一九三六年初出、『古代中國研究』一九六八年所収)。
 - (6) 現行本で使われている文字が、そのまま原初のテキストにも使われていたか否かも問題になるが、漢墓出土のごく一部のものを除き、そこまでの検討は現段階ではできない。
 - (7) 松木民雄「左傳に見えたる社會分業形態について」(『歴史』五二輯、一九七九年)。
 - (8) 拙稿「中國古代における均の理念——均輸平準と『周禮』の思想的検討——」(『思想』七二一號、一九八四年)。
 - (9) 趙錫元「周代『工商食官』的前後後」(『中國古代史論叢』八輯、一九八三年)、堀敏一『中國古代の身分制——良と賤』(一九八七年、九五・一〇一頁)など参照。
 - (10) 「大夫種進對曰、臣聞之賈人、夏則資皮、冬則資絨、早則資舟、水則資車、以待之也。」
 - (11) 文字に疑義のあるものを除いて検討した。各篇の成立年代の推定については渡邊卓『古代中國思想の研究』(一九七三年)五四五頁の表を参照。
 - (12) 拙稿前掲「中國古代における均の理念」。
 - (13) 王制篇の「農農士土工工商商」のほか、儒效篇の君子・農人・賈人・工人、榮辱篇の「工匠農賈」は、身分制的にも商とともに賈・賈人を用いた例である。また儒效篇の農夫・工
- 匠・商賈・君子や富國篇の「商賈の數を省く」などの商賈の例は、商と賈の二つを指すのではなく、右の商・賈・賈人と同様、商人一般を指している熟語である。
 - (14) 拙稿「中國古代の商人と市籍」(『加賀博士退官記念中國文史哲學論集』一九七九年所収)。
 - (15) 金谷治『管子の研究』一九八七年。
 - (16) 同右。
 - (17) 拙稿「後漢時代の徭役と兵役」(『歴史』六六輯、一九八六年)。
 - (18) 拙稿「均輸平準の史料論的研究(二)」(『歴史』六二輯、一九八四年)、及び前掲「中國古代における均の理念」。
 - (19) 『書道全集』第二卷、一九六五年、一六・一七一頁。
 - (20) 秦律十八種既苑律の「其の賈錢」(八三—八七簡。三三三頁。H二七・八頁)など。なお以下の秦簡については、『雲夢睡虎地秦墓』(一九八一年)の簡番號、『睡虎地秦墓竹簡』(一九七八年)の頁數、及び A. F. Hulsewé, *Remnants of Chin Law*, Leiden: E. J. Brill, 1985. の頁數を H 何頁として挙げるにとどめる。
 - (21) 秦簡日書中に賈市の例が見られ(八一四・八四九簡など)、「行賈賈市」(八〇四・九九八簡)のように行賈と連稱する例もある。そして武威縣博物館(黨壽山執筆)「武威新出土杖詔令冊」(『漢簡研究文集』一九八四年)の紹介する王杖詔書令に「賈市毋租」「列肆賈市」とある。これらを見ると、賈市は市での營業を強く意味しながらも「あきない」と讀むべきものではなからうか。

(22) 『商君書』壅令篇の「辟淫游惰の民」と「逆旅の民」と同じであらう。

(23) 拙稿「秦漢時代の大内と少内」(『集刊東洋學』五七號、一九八七年)。

(24) 拙稿前掲「中國古代における均の理念」。

(25) これは公田假興の記事として重要であるが、その解釋は拙稿「漢代の公田——經營形態を中心として——」(『集刊東洋學』二五號、一九七一年)で示した。

(26) この部分が、景帝中五年(前一四五)の制度ではなく、後漢代のものであることは、拙稿「馬車と牛車——中國古代の官人と中世の貴族——」(片野達郎編『綜合研究 中世の文化』一九八八年所収)で述べた。

(27) 平準書と『漢書』食貨志下の文とはかなり字句の異同がある。概して班固の合理的解釋による文字の改變は文意の暢達をもたらすが、彼のもつイデオロギーと彼の生きた時代からの制約はまぬがれ難く、十分に注意する必要がある。

(28) 平中「漢の武帝の算絹錢」(一九五三年初出。『中國古代の田制と税法』一九六七年所収)。

(29) 例えば元封元年(前一〇〇)の均輸平準令。拙稿「均輸平準の史料論的研究(一)」(『歴史』六一輯、一九八三年)参照。

(30) 『漢書』卷六武帝紀によると、この令は元狩四年冬(年頭)に提案實施された。大農令鄭當時の任期はこの四年初頭に及ぶ可能性があるが、一應顏異が四年冬から在任したものとする。

(31) 拙稿「鳳凰山十號墓文書と漢初の商業」(『東北大學教養部紀要』三三號、一九八一年)。

(32) 堀前掲著書二二〇頁。

(33) 佐藤武敏「秦・漢初の漆器の生産について」(『古史春秋』四號、一九八七年)。

(34) 一方では市中に全く人が居住していなかったと考える研究者もあるが(渡部武譯註『四民月令』一九八七年、二二七頁)、酒の醸造など、一定の時間を要し、かつ設備もあるものはそこの宿泊が必要であった筈であり、やはり市中に居住していた者もあったと思う。

(35) 拙稿前掲「後漢時代の徭役と兵役」。

(36) 私は「市居住」者が差別されたのは共同體外の人間であったことに基くと考えた(『中國古代の商人と市籍』)。確かに一方では前引秦律十八種司空律の文や、高祖の抑商策に見られるように、農に對して工商、特に商を差別しようとする傾向が早くからあることは否定できないが、共同體の擴大發展としてとらえる中國古代で、共同體の構成員であるか否かよりも、階級的差別がより重要となるとともに(拙稿「中國史上の『中世』」前掲『綜合研究 中世の文化』所収)、「市居住」に限定されずに、一層商人全體を賤視するようになったのである。

(37) 拙稿前掲「中國古代における均の理念」。

(38) 拙稿「均の理念の展開——王莽から鄭玄へ——」(『東北大學教養部紀要』四三號、一九八五年)。

(39) 楊「坐曰賈、質疑」(『中國史研究』一九八六年二期)。

- (40) 繆稱等の八篇の註がそれであるとされる（金谷治『秦漢思想史研究』一九六〇年、四六〇頁参照）。なお明瞭に許慎註としたものが『太平御覽』卷八二八にあり、「駟」を説明している（拙稿『史記』貨殖列傳の「節駟會」について、『集刊東洋學』五三號、一九八五年）。
- (41) その例が徭役をめぐる議論であり、それをどう解釋すべきかは拙稿前掲「後漢時代の徭役と兵役」において示した。
- (42) 拙稿前掲「均の理念の展開——王莽から鄭玄へ——」。
- (43) 拙稿「均の理念の展開——『周禮』の時代」とその終焉——（『集刊東洋學』五四號、一九八五年）。
- (44) ・(45) 同右。
- (46) 嚴「北魏尙書制度考」（『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』一八本、一九四八年）。
- (47) 以上の諸書については池田溫「中國古代の奴婢觀」（『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』一九八六年）参照。

THE ANCIENT CHINESE CONCEPTS OF
SHANG 商 AND GU 賈
—Their Meaning and Historical Background—

YAMADA Katsuyoshi

It has popularly been understood that the characters *shang* 商 and *gu* 賈 which express ideas of commerce and merchants can be separated in meaning such that *shang* refers to itinerant merchants (*xingshang* 行商) and *gu* refers to stationary merchants or shopkeepers (*zuogu* 坐賈). However, they cannot be restricted to these meanings. They were at times used interchangeably, and each author had a particular tendency in their usage. Moreover, in the Qin and Han periods, the words *gu* and *guren* 賈人 were technical terms used in legal documents to indicate commerce and merchants respectively.

Without regard to this actual situation in his own time, Ban Gu 班固, in the Commerce chapter of his work "Explanations of the White Tiger Palace," asserted that *shang* meant "moving" (*xing* 行) and *gu* meant "stationary" (*zhi* 止). This was because he only considered the description recorded in the *Zuozhuan* and the *Zhouli*. His commerce chapter was written with the intention of showing that the Old Text Theory was superior to the competing New Text Theory.

At the end of the Later Han, the idea that *shang* meant "itinerant" and *gu* meant "stationary" became an established theory due to the work of Zheng Xuan 鄭玄. Nevertheless, this distinction was not strictly followed even in later periods. In these periods, technical terms in legal documents indicating merchants changed from *shanggu* 商賈 in the Wei and Jin to just *shang* in the Six Dynasty period. This latter term was then inherited by the Sui and Tang.